

畫も澤山にあつたが「吉野山」に感じる如き或る物は得て居ないと思つた、これは理論でなく感想である。

私は自然を分類して「油畫の自然」「水彩畫の自然」と區別するとの愚である事は知つて居るが、又一方から思考すると、繪畫の材料の適用によつて各相異した感じを得る事が出来ると思ふ、石井君も場所の相異によつて材料を撰ばねばならぬと主張されたやうだが、石井君のは多く形態に就てであると思ふが、私は感じに於て材料を撰びたいと思ふ、これは今感じたのではなく可成古しから思つて居るのである。

例へば日本畫に適當でない空氣や光線の描寫は日本繪具の範圍でないと云ふのである、私は前述のやうな思想から、水彩の材料は概して靜な自然の現象に適して居ると思ふ。そして小面積に無限の情趣を湛へ得る事に他の材料の企て及ばない水彩畫の顏料の誇りがあると思ふ、キラ／＼煌く光線の描寫や活動した自然は、例外もあるうが概して不適當だと云ひたいのである。これは又材料問題とは別であるが、毎年公私の展覽會が開催せられるごとに、批評家の間に水彩畫の技巧問題が持上る様である、然し私は要するに枝葉の問題であらうと思ふ、油畫の技巧に無制限である如く水彩畫も又自由であると云ひたい、點體描寫であるうと、山本君の所謂重染法描寫を用ひ様と、ナメた様な描き法をしようとする自由であると思ふ、要するに第三者の干渉す可き限りではない、作者の目的さる完全に表現されればよいのである。

以上は私が文部省の水彩畫室に於て感じた事を、何の統一もなく述べた迄で、理屈としては困るが感想として一讀の榮を得たいのである。(四十三年十月十五日)

ワッツ論の註

マネー(E. Manet.)は十九世紀後半、佛國の畫伯にして、所謂印象派の先祖なり。

ホイットスラー(Whistler.)米國に生れたる十九世紀後半の畫家にして、Society of British Artistsの總裁に擧がる。

サーヂェント(Sargent.)十九世紀中頃伊太利に生る、有名なる肖像風俗畫家にして、ロイヤルアカデミー會員。

ミレース(Millais)は同時代英國風景風俗畫家の適なるもの、一八四八年ホルマン、ハントロセツチ等と共に所謂ラファエル前派を創めたり、後ロイヤルアカデミー總裁に擧がる。

レイトン(Leighton.)同時代、英國歴史畫家の大立物一八七八、ロイヤル、アカデミー總裁となる。(幸雄)